



佐藤幸一教育長

大人も子供とともに行動を

では皆さんに、今後の計画などをお願いします。

牛島 まず私の学校の伝統である緑の学習を通して自然保護の意識づけ、実践活動を通じていきたいと思っています。そして、子供たちは最近、例えばゴミや排水の問題など生活と関連したことに非常に関心を持ってきているので、そういうことにも今後取り組んでいきたいと思っています。「これから先、地球はきれいになりますか」というアンケートを五、六年生にとったところ、六十パーセントは汚くなると答えたんです。その理由は、大人は環境をきれいにしようと言う割に、空き缶を車から投げ捨てたり、ゴミを捨てたりしているからと言うわけです。四十パーセントの子供は、リサイクルなどもしてきているからだんだんきれいになっていくのではと希望を持っています。そういうふうには、子供たちも社会の問題に少しずつ目がいついていきますので、生活にかかわる問題を取りあげ、自然に環境につ



子供たちと廃油を利用した石けんづくりに取り組む山口さん

自然や動・植物に対する思いやりを大切に

山口 学校で取り組んでいるボランティア・サービスクラスが地域や家庭でもすぐ表れてきているんです。親の行動を逆に注意したり、登下校時に空き缶を拾って学校に持っていったり、夏休みに自分たちで計画して花火大会などをする時も、後片づけまできちんとするんですよ。そんなふうには家庭でも地域でも定着してきています。こんなふうには小さい頃から身につけていけば大人になってからも自然にやると思えます。

教育長 そうですね。米村さんは、子供たちと石鹸を作ったり、鯉を放流したりしてもおられるんですね。

いて目を向けさせていきたい。そういうカリキュラムを今から作っていききたいと思っています。

山口 私は、私たち親より子供たちの方がこういう問題に関心してしっかり意識して活動していると思うんです。大人の方が行動が伴っていない気がします。私たちの世代は物が豊富で何でも自由に手に入る時代に生まれてきました。子供たちには、そういう物資がゴミになったり、空気や水を汚染しているということを言い聞かせたいと思います。私たち大人が真剣に考え、話し合い、物をたくさん与えるのではなく、少ない物、古い物を大切にすることを親が見本となって実践していくということが一番の教育ではないかなと、今つくづく考えています。まず自分を見直し、子供とともに勉強し、行動していこうと思います。

米村 私たちも活動の輪を広げ、皆の地球を皆できれいにしようじゃないかという気持ちで取り組みたいと思います。以前は、どここの会社の排水などが

でもおられるんですね。

米村 西里小学校に学校田があるので、稲刈りの時、近くの川に八百匹くらい鯉を放したんです。鯉を放つことによって家庭の話にもなります。家庭排水は川に流れていくことも皆が考えてくれると思います。そして有害なものは流さないとか合成洗剤よりも石鹸、それも使いすぎないとか。川の魚に対する思いやりを持つことが大切だと思います。子供たちに少しずつ川とか動植物に対する思いやりや、水源はあんなにきれいなのにどうして何キロも流れないうちに汚れるのか、そんな疑問を持つてもらいたいです。結局、みんな自分とつながっているんですから。

教育長 環境は今まで自然がそれを浄化し、吸収してくれたんですね。しかし現代社会では、自然の浄化力も弱くなり、自然の摂理を学んだり恩恵を感じたりする機会が少ないので、今は、ある程度意図的に環境教育を進めていかなければならないと思います。そういう意味において、今こそやはり環境教育を小学校の低学年から導入する必要がある、学校だけでなく、家庭や地域が一体となった連携のもとに進めなければ効果は上がらないと思います。実際には、熊本県では既に環境教育についての指導実績があちこちから入ってきています。熊本の環境教育は今からということではなく、既に成果が出てきているという感じを持っています。

環境を汚染したとか私たちも思っていました。今は、どこの家庭からも環境破壊につながっているという感覚を持たなきゃいけないんじゃないかと思っています。私たちが仕事で農業をふたり、除草剤をまいたりして、環境を汚しているんですね。やはり今は総点検しなければいけない時だと思っています。そして子供たちに呼びかけて、石鹸づくりや鯉の放流など、できることからやっていきたいと思います。

教育長 今日は各分野で実践的な方々のお話が伺えて心強くなりました。そういったリーダーの方々ももっと増えて実践的な取り組みが県下全体に広がっていくようお願いしたいと思います。そして、行政や学校といった各層が一体となって郷土熊本の豊かな自然を守り、ますます増やしていくというように意識を盛りあげていきたいと思います。県民の皆さんのご協力とご支援をお願いします。

※この対談は、二月十三日に行われたものです。

environmental
環境教育
education